

2010 年雪氷化学分科会報告

雪氷研究大会 (2010・仙台) の開催期間中の 2010 年 9 月 27 日に、東京エレクトロンホール宮城にて、雪氷化学分科会セッションおよび 2010 年度分科会総会が行われた。参加者は 28 名だった。

1. 雪氷化学分科会セッション (講演会)

講演題目: 「海水の生成と融解が大気―海洋間の物質循環に与える影響」

講演者: 野村大樹 (国立極地研究所)

講演要旨: 地球規模の気候をコントロールする要因として、高緯度海域に分布する『海水』が果たす役割は大きい。例えば、海水の存在はアルベドを増大させ、日射吸収の大幅な低下を招く。また、大気―海洋間で断熱材として働き、海洋からの熱放射を軽減させる効果もあると認識されてきた。一方、物質循環の観点からは、海水は単なる大気―海洋間の物質交換の『障壁』として認識されてきた。しかし実際海水は、多孔性の構造を持ち、ガス透過性が大きく、多くの物質を含んでいることが報告されている。本講演では、海水を通しての大気―海洋間の二酸化炭素 (CO_2)・硫化ジメチル (DMS) 交換、海水中の栄養物質の輸送過程について紹介された。

2. 分科会総会

2010 年度雪氷化学分科会総会では、2009 年度の活動報告として 2010 年 2 月 12-14 日に石川県、白山里で行われた「雪合宿」の報告が中澤文男幹

事 (国立極地研) からなされた。引き続き、監査報告が行われ承認された。さらに今年度の活動計画について以下の議論が行われた。

- (1) 次回の「雪合宿」の候補地には、ハワイ島、ニュージーランドでの開催が検討されたが、準備不足と時期尚早と判断され、北海道のトマムを第一候補地に決定し、中村一樹 (北海道大学) が担当することが決まった。
- (2) 今年度から本部事業として行われる「雪氷辞典」の改訂については、これまで雪氷化学の用語があまり掲載されていないことから分科会として積極的に協力することが確認された。また、編集委員会には幹事長の的場が出席し、分科会内にワーキンググループを設立して用語候補、著者の選定を行っていくことが了承された。ワーキンググループのメンバーは、石井吉之、飯塚芳徳 (北大低温)、鈴木啓助 (信州大)、倉元隆之、五十嵐誠、中澤文男 (極地研)、木戸瑞佳 (富山県環境科学センター)、竹内 望 (千葉大) で構成される。
- (3) 「雪氷」編集委員会に雪氷化学特集号を提案することが決まった。半年から 1 年以内の発行を目指すこと、五十嵐誠幹事が特集号を担当することが決められた。

分科会の終了後の懇親会には、多数の方に参加いただき、大変盛況であった。

(雪氷化学分科会幹事長 的場澄人)

(2010 年 10 月 21 日受付)